

# 英国の食料消費に関する一考察

— 地域的分析を中心として —

A Study on the Food Consumption in the United Kingdom  
— In Reference to the Comparative Analysis  
of the Data in terms of Region —

平岡 祥孝

HIRAOKA Yoshiyuki

The objective of this paper is to analyze the trend of the food consumption and is to consider the characteristics of the food consumption pattern, by using the recent data from England, Wales, Scotland and Northern Ireland. Especially, the data from England is divided into the unit of regional data.

The main results are as follows. First, the consumption of meat and potatoes in Northern Ireland is the most of other countries in the United Kingdom. Second, the regional characteristics of food consumption are explained by the comparative analysis of those regions. The background is probably depended on the eating habits which is historically and socially exist.

## I. はじめに

小稿の課題は、近年の連合王国 (the United Kingdom, 以下英国と記す) の食生活の特徴を解明していくために食料消費の実態に関して、地域的視点から分析することにある。

言うまでもなく英国は、イングランド (England), ウェールズ (Wales), スコットランド (Scotland), 北アイルランド (Northern Ireland) の4国から構成されている。当然のことながら、それぞれ国によって歴史的・社会的背景が異なり、それらが食生活にも影響を及ぼしていると考えられる。また、都市部 (urban area) と農村部 (rural area) においても

生活様式が異なる。それゆえ、食生活にも違いが見られることも考えられる。英国の中心国であるイングランドは、最も面積も大きく、人口規模も最も大きい。地域的に見れば、行政区画では9分轄されている。たとえば、ドーバー海峡に面した南イングランドと、スコットランドに接する北イングランドとでは、異なる地域性が存在するであろう。<sup>(1)</sup>

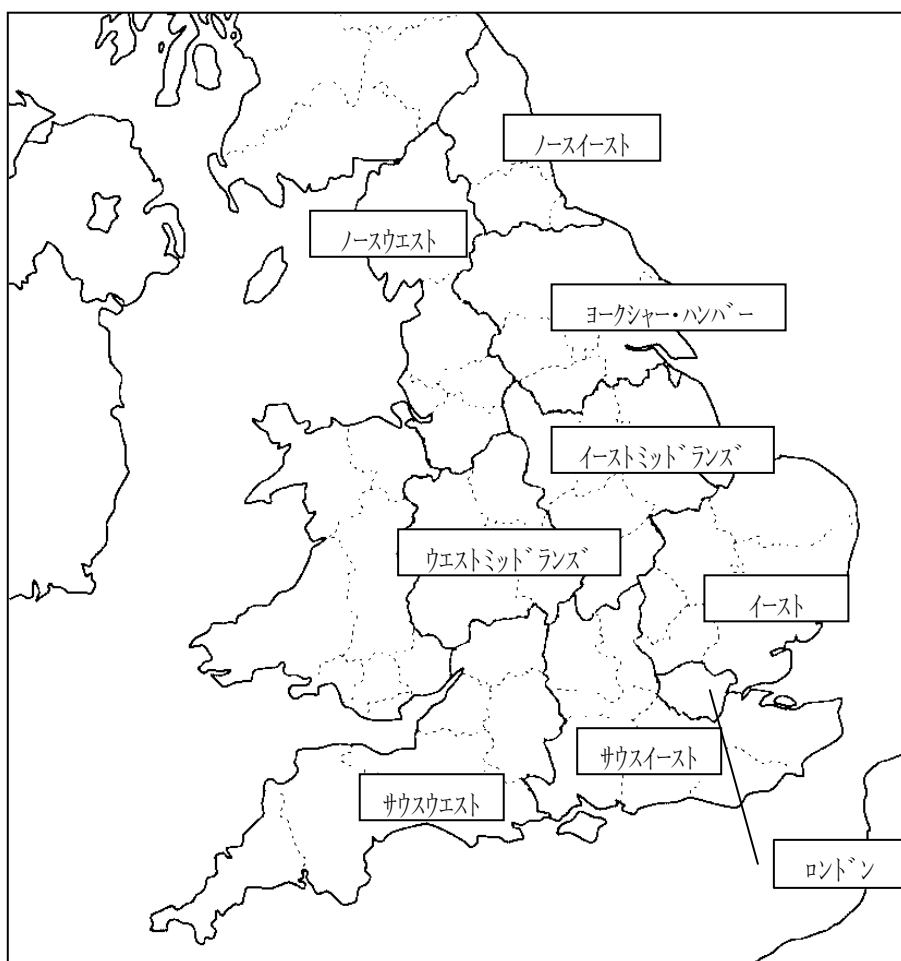


図1 イングランドの9地域

以上のような問題意識を踏まえて小稿では、英国環境・食糧農業省『家庭食料調査 2011 年』（Department for Environment ,Food and Rural Affairs, *Family Food 2011*）所収の統計数値に基づいて、食料消費の動向を分析していく。具体的には、まずイングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの4国について国別比較を行う。そして、4国を都市部と農村部の地域的比較を行う。イングランドでは9行政区画にしたがった地域区分において比較分析を行う。

## II. 4国比較

表1は英国の人口の推移に関して、イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの4国を整理している。同表からも明らかのように、イングランドが人口規模では最大であり、英国人口全体（約6,300万人）の約84%程度を占めている。現在のイングランドの人口は5,300万人程度と推定されている。<sup>(2)</sup>

	イングランド*	ウェールズ*	スコットランド*	北アイルランド* <sup>1)</sup>	連合王国全体
暦年	(百万人)				
1951	41.2	2.6	5.1	1.4	50.2
1961	43.5	2.6	5.2	1.4	52.7
1971	46.4	2.7	5.2	1.5	55.9
1981	46.8	2.8	5.2	1.5	56.4
1991	47.9	2.9	5.1	1.6	57.4
2001	49.5	2.9	5.1	1.7	59.1
2009 <sup>2)</sup>	51.8	3.0	5.2	1.8	61.8
2011 <sup>2)</sup>	52.6	3.0	5.2	1.8	62.6
1) 北アイルランド*の数値は推定値。					
2) 2009年および2011年は推定値。					
出所) ONS , <i>Social Trend 41</i> , p.11 Table 1 を参考にして作成。					

注目すべき点は、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドに比べて、人口増加が顕著であることである。1951年から2001年の50年間で830万人程度増加している。20%強の伸び率である。同期間の50年で見ると、ウェールズでは約11%、北アイルランドでは約13%である。スコットランドの人口は510～520万の範囲で推移しており、人口変化は皆無と言っても過言ではない。

ちなみに年齢階層別人口構成の推移は、表2に示している。同表によれば、16歳未満階層、16～24歳階層の人口割合が緩やかに低下している。他方、65～75歳階層、75歳以上階層は少しずつ上昇している。

表2 英国の年齢階層別人口構成

	16歳未満	16～24歳	25～34歳	35～44歳	45～54歳	55～64歳	64～74歳	75歳以上
暦年	(%)							
1971	25.5	13.2	12.5	11.6	12.2	11.8	8.5	4.7
1981	22.3	14.3	14.2	12.0	11.1	11.0	9.2	5.8
1991	20.3	13.0	15.5	13.8	11.5	10.1	8.8	6.9
2001	20.1	11.0	14.3	15.0	13.2	10.6	8.4	7.5
2009	18.7	12.1	12.9	14.6	13.5	11.8	8.5	7.8
2011	18.6	11.9	13.4	13.8	13.9	11.7	8.8	8.0
2016	18.5	10.9	14.3	12.5	14.0	11.5	9.8	8.5
2021	18.7	10.1	14.0	12.8	12.7	12.4	9.8	9.5
2026	18.4	10.3	13.0	13.6	11.5	12.6	9.7	10.9
2031	18.0	10.6	12.3	13.5	11.9	11.5	10.6	11.7

注) 1971～2009年の数値は中期推定値。2011～31年は2008年数値に基づく予測値。  
出所) ONS , *Social Trend 41* , p.19 Table 3 を参考にして作成。

表3は家計所得および家計食料支出に関して、イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの4国を比較している。週当たり平均粗家計所得ではイングランドが最も高く、702ポンドである。スコットランド690ポンド、ウェールズ600ポンド、北アイルランド577

ポンドと続く。イングランドと北アイルランドでは、週当たり平均粗家計所得において 125 ポンドの差が見られる。

表3 国別家計所得・家計食料支出(2009～11年平均)				
	イングランド <sup>°</sup>	ウェールズ <sup>°</sup>	スコットランド <sup>°</sup>	北アイルランド <sup>°</sup>
	(£)			
週当たり平均粗家計所得	702	600	690	577
週1人当たり家計食品支出				
家庭食料飲料支出	24.28	24.15	25.40	26.32
家庭飲料アルコール支出	2.99	2.79	3.38	2.97
週1人当たり外食支出				
食事・飲料支出	8.49	7.35	8.72	11.01
アルコール支出	3.09	2.76	3.20	4.11
総支出額	38.85	37.05	40.69	44.40
出所) Defra , <i>Family Food 2011</i> , p.28 Table 3.3 を参考にして作成。				

ここで週当たり家計食品支出額を見てみよう。家庭飲用アルコール支出を除いた家庭飲料食料支出額では、さほど大きな差は見られない。最も大きい北アイルランド 26.32 ポンドと最も小さいウェールズ 24.15 ポンドの差は、2.17 ポンドである。家庭飲用アルコール支出額ではどの国も3ポンド前後である。最も大きいスコットランドの 3.38 ポンドと、最も小さいウェールズの 2.79 ポンドでは、0.59 ポンドの差でしかない。

次に週1人当たり外食支出額である。アルコール支出を除く食事・飲用支出額では北アイルランドが最も大きく、11.01 ポンドである。スコットランド 8.71 ポンド、イングランド 8.49 ポンドと続き、ウェールズが最も小さく 7.35 ポンドである。スコットランドとウェールズの差は、3.66 ポンドである。家庭飲料食料支出額の差より 1.49 ポンド大きい。アルコール支出額でも北アイルランドが最も大きく 4.11 ポンドである。同様にウェールズが最も小さく 2.76 ポンドである。その差は 1.35 ポン

ドであり、家庭飲用アルコール支出額の差の2倍以上開いている。

総支出額では北アイルランドが最も高く 44.04 ポンドである。週当たり平均粗家計所得が最も小さい北アイルランドが、食料支出総額では最も大きい。そしてスコットランド 40.69 ポンド、イングランド 38.85 ポンドと続き、ウェールズが最も小さく 37.05 ポンドである。北アイルランドとウェールズの差は 6.99 ポンドである。

表4 国別週1人当たり主要食料品家庭購入量(2009～11年平均)

	単位	イングランド <sup>6</sup>	ウェールズ <sup>6</sup>	スコットランド <sup>6</sup>	北アイルランド <sup>6</sup>
牛乳・生クリーム	ml	1921	2126	1928	2036
チーズ <sup>6</sup>	g	119	114	116	90
肉類(生肉)	g	210	207	186	243
その他肉類・肉製品	g	779	924	837	911
魚	g	154	151	144	125
鶏卵	個	1.7	1.8	1.7	1.6
油脂類	g	179	198	168	159
砂糖・砂糖煮	g	125	161	119	100
馬鈴薯	g	738	819	713	1083
野菜(除く馬鈴薯)	g	1121	1140	945	870
果物	g	1154	1073	1098	1025
穀類	g	1557	1583	1626	1705
ソフト飲料	ml	1682	1934	2084	1795
アルコール飲料	ml	740	842	766	655
菓子類	g	130	149	149	156
出所) Defra, <i>Family Food 2011</i> , p.24 Table 3.1 を参考にして作成。					

表4は週1人当たり主要食料品家庭購入量を示している。<sup>(3)</sup> 牛乳・生クリームはウェールズが2,126mlと最も多い。そして北アイルランド2,036mlである。スコットランドとイングランドでは2,000mlを下回っており、それぞれ1,928ml, 1,921mlである。北アイルランドとイングランドでは200ml以上の差がある。逆にチーズにおいては、イングランドが119gと最も多い。北アイルランドでは90gであり、イングランドとは30g弱の差がある。

肉類では北アイルランドが243gと最も多く、スコットランドが186gと最も少ない。57gの差がある。単純に1ヶ月で見れば200~250gの差となるであろう。その他の肉類・肉製品ではウェールズが924gであり、最も多く家庭購入している。イングランドが最も少なく779gである。単純に1ヶ月で見れば500~600gの差となるであろう。

油脂類はウェールズが198gと最も多く、北アイルランドが159gと最も少ない。砂糖・砂糖煮もウェールズが161gと最も多く、北アイルランドが100gと最も少ない。ウェールズと北アイルランドでは、両食品類からの熱量摂取量には差が大きいであろう。

馬鈴薯は北アイルランドが最も多く、1,083gの購入量である。ウェールズ819g, イングランド738g, スコットランド713gである。北アイルランドと他の3国との差は大きく、北アイルランドでは馬鈴薯利用の家庭料理に特色があると言えよう。<sup>(4)</sup> 他方、馬鈴薯を除く野菜の家庭購入量は北アイルランドが最も少なく、870gである。ウェールズが1,140gと最も多く、イングランド1,121g, スコットランド945gの順である。北アイルランドやスコットランドは、気候風土の面からも生鮮緑色野菜の購入と摂取が少なくなるであろう。

果物ではイングランドが1,154gと最も多く、北アイルランドが1,025gと最も少ない。129gの差が見られる。果物は食品の中では一般的に価格効果が高い。前述したとおり、家計所得はイングランドが最も高く、北

アイルランドは最も低い。この状況を反映していると推察できる。

穀類は北アイルランドが 1,705g と最も多く、イングランドが 1,557g と最も少ない。その差は 148g である。ソフト飲料はスコットランドが最も多く 2,084ml であり、イングランドが 1,682ml と最も少ない。400ml 以上の差がある。アルコール飲料はウェールズが最も多く 842ml であり、北アイルランドが最も少なく 655ml である。300ml 弱の差がある。

### III. 都市部・農村部比較

本章では、グレートブリテン (Great Britain) を構成するイングランド、ウェールズ、スコットランドの都市部と農村部に関して分析を進めていきたい。

表5は週1人当たりの食料支出額を表している。家庭購入食料支出額ではイングランド農村部が最も大きく、3,008 ペンスである。ウェールズ都市部が 2,604 ペンスと最も小さい。両者では 400 ペンス以上の支出差がある。なお各国の都市部と農村部をそれぞれ比較するならば、農村部の方が都市部よりも家庭購入支出額が大きい。とりわけイングランドの都市部と農村部では 356 ペンスの支出差が見られる。

	イングランド*	イングランド*	ウェールズ*	ウェールズ*	スコットランド*	スコットランド*
	都市部	農村部	都市部	農村部	都市部	農村部
	(ペンス/人・週)					
家庭購入食料支出	2652	3008	2604	2812	2573	2893
外食支出	1141	1220	1030	1011	1312	958
出所) Defra , <i>Family Food 2011</i> , p.36 Table 3.8 を参考にして作成。						



外食支出額ではスコットランド都市部が 1,312 ペンスであり、最も大きい。スコットランド農村部が最も小さく、958 ペンスである。ウェールズの都市部では 1,030 ペンス、農村部では 1,011 ペンスであり、わずか 19 ペンスしか違わない。しかしながら、スコットランドの都市部では 1,312 ペンス、農村部では 958 ペンスであり、両者の間には 356 ペンスと著しい差が見られる。

表 6 は、都市部・農村別週 1 人当たり主要食料品家庭購入量を表している。牛乳・生クリームのご家庭購入量において特徴的なことは、イングランドの都市部と農村部での差が最も大きいことである。都市部では 1,874ml であり、農村部では 2,089ml である。200ml 以上の差が見られる。

この理由としては、イングリッシュ・ブレックファーストやアフタヌーンティに代表される食生活習慣、あるいは伝統的な家庭田舎料理の継承において違いが存在していることが挙げられよう。チーズの場合は、どこの国の都市部・農村部にあっても 110g 台～130g 台前半の範囲に収まっている。

肉類ではイングランド農村部が 233g と最も多く、スコットランド都市部が 167g と最も少ない。しかしながら、その他肉類・肉製品の購入量ではスコットランド都市部の方が多い。そしてスコットランド農村部がその他肉類・肉製品の購入量は最も多く、897g である。イングランド都市部より 100g 以上多い。

油脂類の場合は、どこの国の都市部・農村部にあっても 160g 台後半から 200g 強の範囲に収まっている。他方、砂糖・砂糖煮の場合はウェールズ農村部が 224g と突出している。

次位のイングランド農村部の 148g とは 76g の差がある。スコットランド農村部の 117g とは 107g の差がある。農村部においても地域差が存在している。

	単位	イングランド 都市部	イングランド 農村部	ウェールズ 都市部	ウェールズ 農村部	スコットランド 都市部	スコットランド 農村部
牛乳・生クリーム	ml	1874	2089	2020	2076	1922	2088
チーズ	g	114	134	111	119	116	133
肉類（生肉）	g	211	233	181	198	167	205
その他肉類・肉製品	g	785	789	893	815	811	897
魚	g	153	164	160	146	147	139
鶏卵	個	2	2	2	2	2	2
油脂類	g	182	191	187	203	165	191
砂糖・砂糖煮	g	119	148	134	224	117	141
馬鈴薯	g	732	760	765	748	694	817
野菜（除く馬鈴薯）	g	1095	1232	1090	1281	946	1109
果物	g	1103	1284	1046	1381	1096	1248
穀類	g	1546	1580	1617	1539	1684	1723
ソフト飲料	ml	1691	1721	1853	1812	2224	2435
アルコール飲料	ml	717	923	744	824	821	738
菓子類	g	128	134	150	130	147	158
出所) Defra , <i>Family Food 2011</i> , p.36 Table 3.8 を参考にして作成。							

前述したように馬鈴薯の購入量は、4 国のうちスコットランドが最も少なかった。都市部 694g と農村部 817g の差は 123g ある。他方、イングランドやウェールズでは 20～30g 程度の違いしかない。馬鈴薯を除く野菜の購入量ではイングランド農村部が最も多く、1,232g である。スコットランド都市部が 946g と最も少ない。農村部で比べてもスコットランド農村部は 1,109g と最も少ない。果物の購入量もイングランド農村部

が最も多く、1,284g である。ウェールズ都市部が最も少なく、1,046g である。おしなべてイングランド農村部は、食生活が豊かであると言えるだろう。

穀類ではスコットランド農村部が最も多く、1,723g であり、ウェールズ農村部が最も少なく、1,539g である。184g の差がある。ソフト飲料については同表から明らかなように、スコットランドがイングランド、ウェールズに比べて都市部・農村部とも非常に多い。都市部 2,224ml、農村部 2,435ml である。アルコール飲料の購入は、イングランド農村部が 923ml と最も多い。他方、スコットランド農村部が最も少なく、738ml である。

表 7 は、都市部・農村別週 1 人当たり外食量を表している。同表に基づいて特徴点を整理したい。チーズ料理・卵料理・ピザでは、ウェールズ農村部、スコットランド農村部では少なく、それぞれ 14g、15g である。

馬鈴薯や野菜の外食量では地域的差異が見られる。ウェールズ農村部が馬鈴薯および野菜の外食量が最も多く、それぞれ 81g、37g である。スコットランド農村部は馬鈴薯および野菜の外食量が最も少なく、それぞれ 59g、17g である。サンドウィッチの場合は、スコットランド都市部が 82g で最も多く、ウェールズ都市部が 49g で最も少ない。

ソフト飲料（牛乳を含む）とアルコール飲料でも、外食量の地域的差異が見られる。ソフト飲料ではスコットランド都市部が 495ml であり、イングランドやウェールズの外食量よりも圧倒的に多い。アルコール飲料ではウェールズ都市部が最も多く、481ml である。イングランド都市部は 426ml、スコットランド都市部は 421ml である。イングランドでは都市部と農村部では大差はない。しかるに、ウェールズやスコットランドでは都市部と農村部では外食量に差があり、それぞれ 100ml、127ml である。パブ（public house）やレストラン（restaurant）の店舗数が

理由として考えられる。

表7 都市部・農村部別週1人当たり外食量(2009～11年平均)

	単位	イングランド' 都市部	イングランド' 農村部	ウェールズ' 都市部	ウェールズ' 農村部	スコットランド' 都市部	スコットランド' 農村部
インド料理・中国料理・タイ料理	g	31	27	31	25	32	25
肉類・肉製品	g	75	75	73	87	82	62
魚類・魚製品	g	13	15	11	19	15	18
チーズ・卵料理・ピザ'	g	22	22	17	14	25	15
馬鈴薯	g	61	65	74	81	66	59
野菜(除く馬鈴薯)	g	26	29	30	37	22	17
サンドイッチ	g	67	65	49	52	82	68
アイスクリーム・デザート・ケーキ	g	25	29	18	29	28	31
ノンアルコール飲料(含む牛乳)	ml	398	365	363	362	495	418
アルコール飲料	ml	426	418	481	381	421	294
菓子類	g	10	9	10	8	11	13

出所) Defra , *Family Food 2011* , p.38 Table 3.8 を参考にして作成。

表8は、都市部・農村別1人1日当たり摂取熱量とPFC熱供給量比率を表している。熱量について見ると、2,300kcal±50～70kcal程度の範囲と言える。最も小さいイングランド都市部と最も大きいウェールズ農村部との差は130kcalである。同表から明らかなように、イングランド都市部はウェールズ農村部に比べて、タンパク質、脂質および炭水化物の摂取量が下回っている。PFC熱供給量比率は、タンパク質Pが14%台、脂質Fが38%台、炭水化物Cがほぼ47%台の水準にある。

表8 都市部・農村部別1日1人当たり摂取熱量とPFC熱供給量比率(2009～11年平均)

		単位	イングランド 都市部	イングランド 農村部	ウェールズ 都市部	ウェールズ 農村部	スコットランド 都市部	スコットランド 農村部
熱量		kcal	2244	2363	2333	2374	2292	2366
タンパク質 (P)		g	76.9	80.8	80.6	80.8	77.7	80.1
脂質 (F)		g	93	98	97	97	93	98
炭水化物 (C)		g	275	285	283	294	282	291
	P	%	14.1	14.1	14.2	14.0	14.1	14.0
	F	%	38.4	38.7	38.8	38.0	38.0	38.5
	C	%	47.4	47.0	46.9	47.9	47.9	47.5

出所) Defra , *Family Food 2011* , pp.38～39 Table 3.9 を参考にして作成。

#### IV. イングランド地域別比較

前述したとおり、イングランドは政府関係機関設置の行政区画に基づく9地域が設定されている。図1はイングランドの行政区画ごとの地域を示している。この行政区画に基づいて統計データが提供されている。本章ではイングランドの地域別比較を行っていきたい。

表9は、地域別の人口(2008年中期)および失業率(2009年第4四半期)を示している。人口規模ではサウスイーストが最も大きく840万人であり、次にロンドン760万人、ノースウェスト690万人と続く。ノースイーストが最も人口規模が小さく260万人である。

65歳以上男性・60歳以上女性の割合で見ると、ロンドンが13.8%と最も低い。サウスウェストが22.5%で最も高く、引退世代の人口が多いと言える。他方、16歳未満人口の割合では、ウェストミッドランズ、イースト、ロンドン、サウスイーストが19%台である。ノースイーストとサウスウェストは17%台であり、サウスウェストが17.7%と最も小さい。

失業率は3%程度の地域的に格差が見られる。失業率9%以上の地域は

ノースイースト (9.3%), ヨークシャー・ハンバー (9.1%), ウェストミッドランズ(9.4%), ロンドン(9.1%)である。逆に 6%台の地域はイースト (6.5%), サウスイースト(6.2%), サウスウェスト(6.4%)である。

表9 イングランド地域別人口および失業率

	ノース イースト	ノース ウェスト	ヨークシャー ・ハンバー	イースト ミッドランズ	ウェスト ミッドランズ	イースト	ロンドン	サウス イースト	サウス ウェスト
人口(2008年中期) (百万人)	2.6	6.9	5.2	4.4	5.4	5.7	7.6	8.4	5.2
65歳以上男性人口・60歳以上 女性人口の割合 (%)	20.1	19.4	19.1	19.7	19.7	20.2	13.8	19.9	22.5
16歳未満人口の割合 (%)	17.9	18.9	18.6	18.4	19.4	19	19.3	19	17.7
失業率(2009年第4四半期) (%)	9.3	8.5	9.1	7.2	9.4	6.5	9.1	6.2	6.4

出所) ONS, *Regional Trends No42*, pp.97~105 を参考にして作成。

表 10 は、地域別週当たり家計所得を示している。失業率が高い地域であるノースイーストやヨークシャー・ハンバーは可処分所得では 400 ポンド後半の水準であり、500 ポンドを下回っている。ウェストミッドランズも可処分所得は 520 ポンドであり、9 地域の中では下方に位置している。ただし、ロンドンは粗所得、可処分所得とも最も高い水準にあり、それぞれ 982 ポンド、776 ポンドである。可処分所得で見る地域格差は最小 125 ポンド、最大 317 ポンドと大きい。ちなみにロンドンでは、非随意的支出が 200 ポンド以上の負担となっている。

表10 イングランド地域別週当たり家計所得(2008~10年平均)

	ノース イースト	ノース ウェスト	ヨークシャー ・ハンバー	イースト ミッドランズ	ウェスト ミッドランズ	イースト	ロンドン	サウス イースト	サウス ウェスト
	(£)								
粗所得	543	619	570	661	624	749	982	810	666
可処分所得	459	512	477	542	520	616	776	651	555

出所) *Family Spending 2011 edition*, p.187 Table A41 を参考にして作成。

表 11 は、地域別に週 1 人当たり家庭購入食料支出および外食支出を示している。家庭購入食料支出額ではイーストとサウスウエストが高く、2,900 ペンス近い額である。表 9 によれば、イースト、サウスウエストは引退世帯が多く居住していると推測される。家庭料理主体の食生活を送る家庭が多いとも言える。さらにこの点を表 12 で確認したい。

	ノース イースト	ノース ウエスト	ヨークシャー ・ハンバー	イースト ミッドランズ	ウェスト ミッドランズ	イースト	ロンドン	サウス イースト	サウス ウエスト
	(ペンス/人・週)								
家庭購入食料支出	2544	2646	2521	2740	2576	2886	2688	2916	2880
外食支出	1051	1113	1067	1026	1001	1173	1400	1232	1158
出所) Defra , <i>Family Food 2011</i> , p.31 Table 3.5 を参考にして作成。									

	16～24歳	25～34歳	35～44歳	45～64歳	65歳以上	全年齢
	(%)					
テレビ視聴	88	85	88	89	92	89
友人・家族との時間	87	85	85	83	82	84
音楽鑑賞	90	78	76	74	69	76
ショッピング	71	73	74	69	69	71
読書	53	62	65	72	73	67
外食(レストラン)	66	71	70	72	59	63
インターネット・e-mail	79	77	71	57	24	59
スポーツ・エクササイズ	63	63	60	55	62	49
ガーデニング	16	36	51	64	62	49
クラブ・サークル	59	63	50	44	33	48
映画館	72	61	55	42	21	48
出所) ONS , <i>Social Trend 41</i> , p.133 Table 1 を参考にして作成。						

表 12 は、イングランドにおける年齢階層別自由時間行動（2009/10 年度）を示している。外食を見るならば、25~34 歳層、35~44 歳層、45~64 歳層が 70%以上となっている。しかるに、65 歳以上層では 59%であり、全年齢階層平均 63%よりも低い。

ヨークシャー・ハンバー、ノースイースト、ウエストミッドランズでは、家庭購入食料支出額は 2,500 ペンス台である。300 ペンス以上の開きがある。これらの地域は失業率も高く、可処分所得も相対的に低い水準にある。

ロンドンでは可処分所得が最も高い地域であるので、外食支出額が 1,400 ポンドで 9 地域中最も大きいことは当然であろう。次位のサウスイーストよりも 168 ペンス多い。逆にサウスイーストの家庭購入食料支出額はロンドンの場合よりも 228 ペンス多い。外食支出は可処分所得と関係性が強い。

ウエストミッドランズでの外食支出額は 1,001 ポンドであり、9 地域中最低水準である。ウエストミッドランズ失業率が最も高い地域であるとともに、可処分所得も相対的に低水準であることが要因として挙げられよう。

表 13 は、地域別週 1 人当たり主要食料品家庭購入量を示している。イーストミッドランズ、サウスウエスト、ノースウエストでは、牛乳・生クリームが 2,000ml を超えている。これらの地域は可処分所得が相対的に低位にある。とりわけサウスウエストは引退世代の家庭も多い。他方、ロンドンは 1,658ml と、牛乳・生クリームの購入量が最も少ない。可処分所得が最も高いロンドンは移民も多く多文化社会が形成されており、英国人の伝統的な食生活習慣である紅茶（tea with milk）の飲用も地域に比べて低い水準かもしれない。チーズの購入量ではノースイーストが 97g で最も少なく、サウスウエストが 142g で最も多い。45g の差がある。



肉類の場合には 190～240g の範囲に収まっている。その他肉類・肉製品の購入量はロンドンが最も少なく 700g 以下である。他方、ノースイースト、ノースウエスト、ウエストミッドランズでは 800g を超えている。魚の購入量はほぼ 140～170g の範囲に収まっている。

表13 イングランド地域別週1人当たり主要食料品家庭購入量(2009～11年平均)

	単位	ノースイースト	ノースウエスト	ヨークシャー・ハンバー	イーストミッドランズ	ウエストミッドランズ	イースト	ロンドン	サウスイースト	サウスウエスト
牛乳・生クリーム	ml	1927	2027	1919	2098	1918	1923	1658	1879	2057
チーズ	g	97	108	112	131	109	133	100	134	142
肉類(生肉)	g	240	212	193	197	206	219	200	211	225
その他肉類・肉製品	g	839	813	771	789	810	790	698	783	779
魚	g	156	145	148	152	145	165	171	152	144
鶏卵	個	2	2	2	2	2	2	2	2	2
油脂類	g	159	184	172	192	189	173	180	164	190
砂糖・砂糖煮	g	119	116	121	136	133	130	113	127	139
馬鈴薯	g	818	759	733	774	854	725	555	730	818
野菜(除く馬鈴薯)	g	1026	981	1033	1176	1088	1160	1171	1179	1230
果物	g	942	1030	987	1173	1004	1272	1325	1239	1226
穀類	g	1564	1544	1518	1615	1632	1585	1465	1526	1628
ソフト飲料	ml	1737	1673	1644	1855	1845	1795	1307	1727	1737
アルコール飲料	ml	950	827	827	788	717	739	486	732	788
菓子類	g	154	134	133	140	133	134	98	130	135

出所) Defra, *Family Food 2011*, p.31 Table 3.5 を参考にして作成。

馬鈴薯購入量は地域的に差が見られる。ウエストミッドランズが 854g と最も多く、ノースイーストとサウスウエストが 818g で続く。これら 3 地域が 800g を超えている。ノースウエスト、ヨークシャー・ハンバー、イーストミッドランズ、イースト、サウスイーストは 700g 台である。

ロンドンだけ 555g と極端に少ない。この理由の一つは、おそらく多文化社会の形成ではないだろうか。馬鈴薯を除く野菜の場合はノースウエストが他地域と比べて少なく、981g である。その他の地域では 1,000～1,200g 台の範囲に収まっている。サウスウエストが 1,230g と最も多い。

果物購入量はノースイーストとヨークシャー・ハンバーにおいて少なく、それぞれ 942g, 987g である。ロンドンが最も多く 1,325 g である。一般的に果物は、所得の増加につれて購入量が増加する財に分類される。それゆえ、可処分所得が最も高いロンドンでの購入量が多いと考えられる。穀類の場合はロンドンが 1,465g と最も少ない。他の地域では 1,500～1,600g 台前半の範囲に収まっている。

ソフト飲料の購入量は、イーストミッドランズとウエストミッドランズが 1,800ml 以上で最も多く、それぞれ 1,855ml, 1,845ml である。これとは対照的にロンドンでは 1,307ml であり、最も少ない。その他の地域では、ソフト飲料の購入量は 1,600ml 台～1,700ml 台の範囲である。アルコール飲料の購入量にも地域的特徴が見られる。最も多いノースイースト 950ml と最も少ないロンドン 486ml では 464ml の開きがある。ロンドンではパブ等の店舗数が多いことも、家庭購入量が少ない原因の一つと考えられる。

表 14 は、地域別の 1 人 1 日当たり摂取熱量と P F C 熱供給量比率を示している。摂取熱量は最も低いロンドンの 2,164kcal を除けば、他の地域では 2,200kcal 台～2,300kcal 台の範囲に収まっている。最も高いサウスウエストが 2,378kcal であるので、ロンドンとは 200cal 以上の差がある。熱量タンパク質摂取量はロンドンが最も少なく、74.9g である。サウスウエストが最も多く、80.3g である。脂質摂取量はどの地域も 90g 台である。最大地域差はロンドンとサウスウエストで 9g である。炭水化物摂取量は 260g 台後半～290g 強の範囲に収まっている。最大地域差はロンドンとサウスウエストで 36g である。

P F C熱供給量比率では目立った違いは見られない。タンパク質Pは13.9～14.4%，脂質Fは37.8～38.9%，炭水化物Cは46.7～48.2%の範囲にそれぞれ収まっている。

表14 イングランド地域別1日1人当たり摂取熱量とPFC熱供給量比率(2009～11年平均)

	単位	ノース イースト	ノース ウェスト	ヨークシャー ・ハンバー	イースト ミッドランズ	ウェスト ミッドランズ	イースト	ロンドン	サウス イースト	サウス ウェスト	
熱量	kcal	2253	2260	2210	2335	2292	2303	2164	2262	2378	
タンパク質 (P)	g	78.1	77.9	75.8	79.2	77.5	79.0	74.9	77.3	80.3	
脂質 (F)	g	92	94	92	96	93	95	95	94	99	
炭水化物 (C)	g	275	272	269	288	286	283	283	276	291	
	P	%	14.4	14.3	14.2	14.0	13.9	14.1	14.1	14.2	13.9
	F	%	37.9	38.9	38.5	38.2	37.8	38.3	38.3	38.5	38.6
	C	%	47.6	46.7	47.2	47.8	48.2	47.5	47.5	47.2	47.3

出所) Defra, *Family Food 2011*, p.32～33 Table 3.6を参考にして作成。

## V. むすびにかえて

以上のように小稿では、連合王国の食料消費に関して国別比較、都市部・農村別比較、イングランドの地域別比較を行ってきた。

国別比較においては、北アイルランドの食料消費に特徴が見られることである。グレートブリテンの国々と比較して、肉類（生肉）、馬鈴薯および穀類の家庭購入量が多いことである。その一方で、チーズおよび馬鈴薯を除く野菜の購入量は、グレートブリテンの国々と比較して最も少ない。このような特徴が表れる理由として、各国独自の歴史的・社会的基盤の上に食生活習慣が存在していること、農業生産構造が異なっていることが背景にあると考えられる。今後、社会史的視点および農業史的視点から考察を深めていきたい。

都市部・農村部比較においては、一般的に都市部よりも農村部の方が家庭購入食料支出は多い。また外出食支出でも、イングランド農村部の方がイングランド都市部よりも支出額は多い。牛乳・生クリーム of 家庭購入量は農村部の方が都市部よりも多い。スコットランドでは馬鈴薯および馬鈴薯を除く野菜の家庭購入量において、都市部と農村部に大きな差が見られる。肉類（生肉）、その他肉類・肉製品の家庭購入量も農村部が多い。それゆえ、スコットランド農村部では英国の伝統的家庭料理が受け継がれていると、推察できる。

イングランド地域別比較においては、地域経済格差が「食の地域性」の要因として挙げられよう。家庭購入支出額が少ない地域は失業率も高く、可処分所得も相対的に低い水準にある。さらに外出食支出は、可処分所得と関係性が強い。

なおイングランドの地域別比較では、さらに地域特性を詳細に明らかにしていくことが必要となる。たとえば、移民流入者の出身国、家族構成、職業分布、大型小売店舗数、外出店舗数などを整理するならば、各地域の食生活実態の解明が進むであろう。今後、様々な統計数値の収集と分析を行った上で稿を改めて論じたい。

[註]

- (1) 「食料消費における連合王国国別比較やイングランド地域別比較に関する先行研究としては平岡（2008）、平岡（2009）をさしあたり参照されたい。
- (2) 連合王国の国土面積は24万2,495km<sup>2</sup>、グレートブリテンの面積は22万8,919 km<sup>2</sup>である。その中でイングランドは13万279 km<sup>2</sup>であり、面積的には連合王国の約55%、グレートブリテンの約58%を占める。
- (3) 鶏卵の週一人当たり消費量は1955～70年代前半において4.0個を超えていた。しかしながら、現在では2.0個以下となっているうえに、比較分析からは大きな差が見られないので、本文中では言及し

ていない。

- (4) 従来は食料の海外依存度が高かった連合王国においては、馬鈴薯は第二次世界大戦以前から非常に自給率が高い農産物であった。また、熱量の観点からは他の農産物と比較して、馬鈴薯は土地生産性が高い作目であった。

[参考文献]

- [1] Department for Environment, Food and Rural Affairs 2012 *Family Food 2011*.
- [2] 平岡祥孝 2006 「近年のイギリスにおける外食動向に関する一考察」, 『北海道武蔵女子短期大学紀要』第 38 号, pp. 86~114.
- [3] 平岡祥孝 2008 「連合王国における食料消費に関する一考察 — イングランド・ウェールズ・スコットランド・北アイルランドの比較分析を中心として — 」, 『北海道武蔵女子短期大学紀要』第 40 号, pp. 285~310.
- [4] 平岡祥孝 2009 「イングランドの食料消費に関する一考察 — 地域比較を中心として — 」, 『北海道武蔵女子短期大学紀要』第 41 号, pp. 151~180.
- [5] Horsfield, G. 2011 *Family Spending 2011 edition*, Palgrave.
- [6] 金度渕 2003a 「1980 年代のイギリスにおける小売業の発展とその背景としての消費の変化 — 消費された食品の推移を中心に — 」, 『大学院研究年報商学研究科篇』(中央大学)第 32 号, pp. 159~172.
- [7] 金度渕 2003b 「1980 年代イギリスにおける食料消費と女性就業化との関連性についての一考察」, 『大学院研究年報商学研究科篇』(中央大学)第 33 号, pp. 271~282.
- [8] The Office for National Statistics 2011 *Social Trend 41st Edition*.
- [9] The Office for National Statistics 2011 *Regional Trend No.42*.

(ひらおか よしゆき, 札幌大谷大学社会学部教授)